

『林勿邨殿撰贈琉球中山王詩書卷』について（下）

崎 原 麗 霞

Collected Poems of Rinbutusun to the King of Ryukyu Chuzan (Part II)

Reika SAKIHARA

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第1号別刷

2008年3月31日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.1
March, 2008

『林勿邨殿撰贈琉球中山王詩書卷』について (下)

崎 原 麗 霞*

Collected Poems of Rinbutusun to the King of Ryukyu Chuzan (Part II) Reika SAKIHARA

留別五十韻
相見應前定、乘風濟巨川。
簡書膺肅若、潮汐履恬然。
導以簪金使、迎來獨木船。
東西溝塹外、南北砲臺前。
登岸方為客、居樓果似僊。
征夫遑告瘁、地主共稱賢。
美秀山川氣、沈潛道義淵。
蘭言遲晉接、芝宇快周旋。
使節競詳奉、皇仁次第宣。
懷威無隕越、式禮莫尤愆。
儀肆分庭習、文修適館全。
因風停海舶、按節啓賓筵。
酒送八重島、茶烹第一泉。
供盆紅柏燦、充筐白蕉鮮。
買夏輸鄉荔、吟秋老沼蓮。
廩庖忌困乏、師旅獲安便。
燥溼時無苦、游觀景更妍。
名卿芳榼挈、適子綵衣翩。
娛彼池臺樂、貽將縞紵連。
凡茲嘉惠貺、頃使旅懷蠲。
此意羣知感、相當我倍憐。
驛通榕蔭啓、族訪桑村遷。
敦樸多醇俗、茹辛少有年。
女紅資卉服、男職在瓜田。
民尚難鮮食、吾何重餽牽。
供需裁尺籍、樽節撤加籩。
剔蠹思常密、然犀覺偶先。
區區雖補小、皎皎所持堅。
喜聽歡騰地、欣瞻澤自天。
雲霓應共慰、雨露本無偏。
苟克靈承者、真看誕降焉。
宮庭佳氣滿、里社瑞光圓。

芹水文昌入、松岡壽寓綿。
枝方榮棣鄂、材盡選楠楸。
況重維城寄、宜參大學篇。
成人功在始、正己慾無權。
孝弟慈為本、詩書禮更研。
鳳雛輝覽下、麟趾道遵平。
理向脩齋悟、工從格致專。
孚心能遇泰、坤道合承乾。
寵眷三山萃、邦家百祿聯。
積茲期望切、形作頌言虔。
屈指迴瀾近、浮蹤買櫂還。
裝輕羞陸賈、槎穩載張騫。
歸報恭藩靖、欽承聖化甄。
天顏知有喜、海角慰孤懸。
春樹回眸外、停雲極目邊。
蒼蒼波萬疊、渺渺路三千。
無限相思處、難期繼見緣。
王其愛玉體、珍重食兼眠。

前詩既就、情不能已。揮筆成此、聊以當陽關三疊之意云。

慇懃杯酒勸東宮、一曲驪歌黯澹中。
半載定邀心跡鑒、三生恨少語言通。
將離祖席來今雨、遠送征帆借大風。
為問漫湖深幾尺、桃花潭水未應同。
豈徒分手恨河梁、更隔微茫萬里洋。
雲樹多情勞竚立、露葭何處話脩長。
飄如陣馬占輕捷、舟有神螺迓吉祥。
天際西歸重回首、斜陽辨嶽影青蒼。
聚散由來夢幻如、當前不覺轉尋虛。
兼程里鼓難規遠、舊館賓筵輒憶初。
久敬可要歌燕樂、外交未許食魚書。
他時驛使能相遇、傳語平安訊起居。

* 鳥取大学国際交流センター 〒680-8550 鳥取県鳥取市湖山町南4丁目101番地
Center for International Affairs of Tottori University, 4-101, Minami Koyama-cho, Tottori, 680-8550, Japan

語 釈

前定:さだめ。
濟:渡る。
巨川:海をさす。
簡書:天子の詔書。
膺:うく。受ける。
肅:厳肅。
潮汐:潮の干満。
履:踏み行う。
恬然:ゆったりとしている。
簪金:士族のしるしのジューファーをさす。
迎來:迎える。
溝塹:溝。
樓:天使館をさす。
僊:仙の異体字。仙人。
征夫:旅人。
遑:あわただしく。
瘁:疲れる。
地主:土地の主。琉球中山王をさす。
稱賢:賢能を挙用すること。
沈潜:生き沈み。
道義:人の行うべき正しい道。
蘭言:意気投合の言葉。
遲:望む。思う。願う。
晋接:付き合い。接触。謁見。
芝宇:蘭言の対句。
周旋:たちめぐること。
競:慎む。
皇仁:皇帝の仁徳。
次第:等級。次第。
宣:述べる。
懷威:威力を恐れる。
隕越:不敬の罪。
式禮:挨拶。お辞儀をすること。
尤愆:罪による処罰。
儀:儀礼。
肄:学習。
啓:勧める。
賓筵:貴賓を招待する宴席。
烹:沸かす。
第一泉:龍樋をさす。
供盆:観賞用の鉢植え。

燦:燦燦としている様子。
筐:竹類のかご。
鮮:生き生きとしている様子。
夏輪郷:琉球の地名と思われる。
荔:レイシ。
秋老沼:場所名と思われる。
廩庖:ここでは使節団を指す。
忌:忌む。
困乏:疲れ。
師旅:ここでは使節団をさす。
安便:安らぎと便利さ。
燥溼:イライラする。
妍:美しい。
名卿:官僚。要職。
芳:芳しい。
榼:器具。鞘。
挈:持ち物をさす。
適子:童子。少年。
綵衣:鮮やかな衣装。
翩:美しく踊っている様子。
賄:贈る。
綢紵:友人間の贈り物。又は友情をいう。
連:つながり。
賄:賜る。
蠲:免除。
知感:分かる。感じ取る。
相當:ふさわしい。
倍憐:更に慈しむ。
族:群れ。
桑村:久米村。
遷:仙に同じ。
女紅:女子の仕事。
資:助ける。はかる。
卉服:花模様の衣装。
男職:男子の仕事。
鮮食:食料の確保。
何:なんぞ。反語。
重:重んじる
餼牽:広く食料、肉を指す。
供需:供給と需要。
裁:裁量する。
尺籍:儒教以外の書籍。

樽節：抑制。節約。
撤：取り除く。
加籩：特別に優遇する。
剔：取り除く。
蠹：きくいむし。
剔蠹：旧弊を取り除く。
然犀：洞察の意。
區區：わずか。
補小：少ないさま。
皎皎：皓皓とする。
持堅：堅持。
喜聴歡騰地：大地から歓声を上げるのを喜んで聞く。
欣瞻澤自天：天からの恵を喜んでいただく。
雲霓應共慰：彩雲と虹は共に共有すべきの意。
雨露本無偏：大自然は公平であるという意。
苟克靈承者、真看誕降焉：神の御加護を承る者（国王）のご降臨を迎えるという意。
宮庭：宮廷。
佳氣：吉祥の気。
里社：宮廷の対句。
瑞光：吉祥の対句。
圓：丸い。円満。
成人：幼い者が成長すること。
正已：己を正す。
無權：権力がないこと。
孝弟：孝悌。
研：みがく。
鳳雛：才気活発な少年。
麟趾：鳳雛の対語。
脩齋：「修身齊家」の略。身を修め家を整える。
格致：物事の原理を究める。
孚心：真心。
泰：安らかなこと。
坤道：大地の道。
寵眷：寵愛して目をかけること。
邦家：くに。
屈指：指折りして数える。
蹤：いかだ。
櫂：いかだ。
還：帰還する。

陸賈：中国、前漢初期の政治家。楚の人。高祖に仕え、南越王趙陀を諭して漢に臣従させ、その功により太中大夫に任ぜられた。
張騫：前漢の外交使節。
聖化：帝王の徳化。
天顔：天子の顔。
回眸：振り返ってみる。
繼見：再会する。
聊：いささか。
陽關三疊：送別の歌。
驪歌：別れの歌。
半載：人生の半分。
定：さだめ。
祖席：別れの宴。
分手：別れる。
河梁：送別の地。又は送別の歌という意。
雲樹：雲にかかった樹木。
露葭：露をおびた草。
颿：帆に同じ。
陣馬：出陣する馬の如く。
輕捷：道のりが速いこと。
迓：迎える。
辨嶽：弁嶽。
青蒼：青々としている。
由來：もとより。
兼程：夜を日についで。
規：はかる。
輒：たびに。
燕樂：酒宴を開いて楽しむこと。
奮：答に同じ。
魚書：手紙。
他時：他日。
驛使：進貢使。

現代文大意

留別¹五十韻²

運命に導かれ巡り会い、風に乗り海を渡った。
勅書を受け取った際は厳粛たる趣きであったが、平素はゆったりとした日々を送っている。
かんざしを挿した使者（士族）に導かれ、独木船を

¹ 別れに際し、物あるいは詩などを残すこと。

² 五文字の五十句韻文。

迎えた。
東西の海の外側や、南北の砲台の前をめぐる。
岸の上り客となり、天使館に住めばはなはだ仙人の
気分を味わう。
旅人の我々は疲れを告げ、中山王は我々を賢能とし
て迎える。
美しい山川の佳気は道義（人の行うべき正しい道）
の淵に深く潜む。
意気投合で出合いを喜ぶ。
使節は使命をつつしみ、皇帝の勅書を宣べる。
儀式は恭しく行われ、式礼もすらすらとはかどった。
琉球は儀礼を学び、心得ているように思える。
風のため船は帰航できず、中山王はしきたりに従い
使節を招宴す。
酒をもって八重山まで送り、茶は第一泉で沸かす。
鉢植の紅柏は色鮮やかで、かごに植えた白蕉はいき
いきとしている。
夏輪郷のレイシを買い求め、秋老沼の蓮を詠う。
使節団は疲れを忌み、王府の手配で安らぎを得た。
乾燥している日も湿気のある日も苦しみがなく、散
策して景色を楽しむ。
名卿（官僚）は香ばしい鞆をさし、士族の少年は鮮
やかな衣装を身にまとう。
舞台を楽しみ、友情を示す贈り物を遺した。
（琉球は）皇帝からの恵みを賜り、使者からの配慮
をもらった。
その気持ちは互いにわかりあい、さらに互いにいつ
くしむ。
宿まで榕蔭（ガジュマルの木陰）が続き、我々は群
れで久米村の仙境を訪ねる。
庶民は純朴で、つつましい生活に長らく耐えている。
女子は鮮やかな衣装を紡ぎ、男子は畠で瓜を植える。
庶民は新鮮な食を確保し難く、我々も食事に贅沢を
言うわけには行かない。
供給と需要に応じ、節約のため我々は特別な待遇を
取り下げた。
旧弊を取り除き、物の本質を洞察する。
わずかなことではあるが、皓々として堅持すること
がありがたい。
歓声が立つのを聴き、天からの恵みをみる。
彩雲と虹は共に共有すべき、雨と露は偏ることはい
ない（大自然は公平である）。

神の御加護に守られている王のご降臨を見る。
宮廷には佳氣（吉祥の気）が満ち、里社（宮廷の対
句）は瑞光の光に包まれている。
恵みの水が流れており、松が茂る岡には壽寓（王宮）
がつながる。
建築に使われている材木は盡く楠楓が選ばれている。
国の運営は「大學」の篇を参考にすべし。
物事の運びは始めが肝心であり、自らを正すには無
權の心が必要である。
孝悌は慈を本とし、詩書の礼を究める。
才氣活発な王は輝いているように見えた。
理は修身齊家の悟りを引き出し、工は物事の原理の
究明を導く。
真心あれば安泰と出合い、坤道は乾に合致する。
三山の粹を大切にすれば、琉球は百の祿に恵まれる。
（琉球の）期待は切実であり、その態度も敬虔である。
指折りして数えれば帰国が近く、楫を立てて船を準
備して帰る用意をする。
輕装にして商人の陸賈をはずかしめ、船は我を乗せ
て凱旋する。
帰国して琉球の心を報告し、皇帝に琉球への恵みを
請う。
天子はそれを知れば、海角にいる琉球を慈しむこと
であろう。
忽々たる樹木は目から離れて見えなくなり、雲は遠
くなる。
蒼蒼たる波は万丈に重なり、浩々たる海は果てしな
く広がる。
無限の思いは再会を期待するが実現しがたい。
王にご玉体をご自愛し、食事兼睡眠に気をつけるこ
とを願う。

上の詩はすでに完成したが、情を抑えることができ
ない。揮毫してこれを書き、もっていささかの送別
の歌に当たる。

しきりに杯酒を勧められ、一曲の別れ歌は黯澹の気
持を誘う。
半年の付き合いは心の鏡となり、三生^{さんしょう}にして言葉が
通じないことをくやむ。
宴席を離れようとする今に恵みの雨が降り、帰国の
船を送る大風を待つ。

漫湖の深さは幾尺なるかと問いたが、桃花潭の水は末にこれを答えてくれている。

別れを前に送別の歌を恨み、更に王とは茫茫たる萬里の海を隔てている。

聳え立つ樹木は多情に立ち止り、露を光らせた草は我々に語りかけている。

帆が陣馬のように走ることを願い、船は神螺に守られて吉祥を迎える。

天の際を西に振り向けば、夕日に包まれている弁ヶ嶽は青々と茂っている。

出会いは夢の如き、別れを目の前にして人生の無力を覚える。

帰途を急ぐ中、酒宴に招待されるたびに初対面を思い出す。

外交の禁忌で王に手紙を出す許しを得ていないので後日、進貢の使者と中国で巡り会うことがあれば、王のご平安を尋ねご起居を聞こう。

要 約

前世の定めに導かれて風に乗り海を渡り中山王に出会った。島での暮らしはまさに仙人気分。女性は鮮やかな衣装を織り、男性は畑仕事をこなしている。庶民が食料に困っているのを、使節団も食事に肉などの贅沢は言えない。帰国後は琉球の心を報告し、皇帝に琉球への恵みを請う。言葉は通じないが、帰国の途にいたら再度会えないことを思うと、辛い気持ちになるという別れを惜しむ五言の五十韻（百句）。

「九月四日承惠鞠華作歌報之」

生平愛花勝愛寶、百五韶光恣傾倒。
秋花韻較春花高、皎潔貞心證懷抱。
憶從少小慕索駝、羅致羣芳娛圃老。
異卉抽莖欲過牆、其餘百色衣裳好。
十載長安古刹秋、天涯著意憐芳草。
供養勤調燥溼宜、爐溫井沃頻心禱。
壯觀何期海外馳、好風吹我來瑤島。
蕉園松嶺竹籬邨、到處尋芳細評藻。

主人愛客亦愛花、時將顏色供搜討。
攬勝還過花萼樓、偶逢佳友開猶早。
征帆欲挂觀面遙、離腸曲曲籬根遶。

忽看僊館起樓臺、羅綺紛敷呈鮮皓。

或攜玉參差、或佩金騷褻。

絳袍自翩翩、紫綬亦矯矯。

一笑問何來、欣然通介紹。

家在中山東苑東、屏風萬疊圍叢篠。

茶亭側下是零壇、常有梢雲冠其嶠。

手植宜將嘉樹封、承恩獨立煙巒表。

我聞崎山奇、來龍一脈舒綿繆。

松石中開大壑渟、雲濤蜃采騰靈杳。

屢欲從之緣太慳、風雨聲狂刮昏曉。

重九難邀落帽賓、卧游旅夢長飛繞。

見花如見人、心跡雙了了。

手把冷香持、意期晚節保。

月明千里總不殊、清影當空鑒晶皎。

靈根況復善延年、滋液龍潭秘深窈。

昔傳甘谷在南陽、今見望僊開閣道。

強飲我未能、舉杯酌穹昊。

願借蓬山作酒壺、倒傾滄水為清醪。

上祝吾皇受祜萬斯年、近亦使王大壽考。

寓居半載、屢荷盛情、幸蘭臭之攸親、籍蕪詞以徑達。

今當遠別、無可留貽、特都寸長繕、以尺素如許。登之几席、惠肯覽觀、則萬里雲天、室遐人邇、豈非翰墨緣深哉。

惟中山王正之。

道光十有八年歲在戊戌重陽之月、使者林鴻年倚裝書於虬島節館之長風閣中。

語 釈

承惠：賜る。

鞠：菊に同じ。

華：花に同じ。

生平：平素。

愛：愛しむ。

寶：宝物。

百五：多い。

韶光：春の美しい景色。

恣：気まま。

傾倒：感服する。

較：比べる。

皎潔：純白である。

貞心：真心。

懷抱：真心。

少小：幼いとき。
索：さびしい。
駝：馳に同じ。
羅致：広く招き集める。
羣芳：多数の美女。
娛：楽しむ。
圃老：花畑。
異卉：特別に美しい花卉。
抽莖：茎を伸ばす。
燥溼：乾燥と湿度
爐溫井沃：ろばたが温かく、井戸が多いという意か。
邨：村に同じ。
到處：いたるところ。
評：定める。
藻：美しい詩文。
顔色：色とりどりの花をさす。
搜討：検討。
攬勝：美しい景色。
花萼：花びら。
征帆：遠征する船。
欲挂：帆を揚げようとする。
覲面：面会。再会。
離腸：別れ歌。
曲曲：数曲。
籬根：垣の根。
遶：漂う。
僊館：天使館をさす。
羅綺：華麗なる衣装。
敷：敷く。
呈：呈する。
鮮皓：色鮮やかな意。
驤裏：駿馬。
絳袍：真っ赤な官服。
翩翩：瀟洒なまさ。
紫綬：紫の紐。帯。
矯矯：勇ましいさま。
欣然：喜ぶさま。
圍：囲む。
叢篠：細い竹が植えられている竹林。
雩壇：雨乞いの祭壇。
梢雲：瑞雲。めでたい雲。
冠：かんむる。

嶺：山頂。
手植：自らの手で植えること。
封：土を盛ること。
煙巒：山中のもや。
綿繻：綿々たる。
渟：とどまる。
雲濤蜃采騰靈杳：雲と霧が漂い、変化千万の意。
慳：ない。
昏曉：たそがれと暁。
重九：陰暦9月9日の称。重陽の日。
落帽：重陽の日。
卧游：山水の画幅を臥しながら見て、その地に遊んだような気持ちで楽しむこと。
了了：賢いさま。理解の速いさま。
冷香：清らかな花。
意期：期待する。
靈根：体をさす。
滋液：甘味のある液。
僊：仙に同じ。
閣道：栈道。
穹昊：青空。
蓬山：山々。
滄水：海水。
清醪：清酒。
上：中国皇帝をさす。
祐：神の保護。
萬斯年：末永い。
近：近く。ここでは中山王をさす。
使：せしむ。
考：遠くまで。
寓居：旅。仮住まい。
盛情：手厚いもてなし。
蘭臭：意気投合すること。
攸：はるかに遠いさま。
親：親しくなる。
籍：借に同じ。借りる。
蕪詞：乱雑の言葉。謙讓語。
徑達：心が通じ合うさま。
留貽：贈る。遺す。
特都：特別に任命された官吏。
寸：ほんの少し。
長繕：長い文章。

尺素：書簡。特に旧式書簡をさす。

如許：このように。

几席：数曲。

覧観：鑑賞。

室遐人通：遠く離れているが心は通じ合うという意。

翰墨：筆墨。文章・絵画の総称。

惟：願う。

倚装：荷物に寄りかかる。

虬島：琉球島

節館：使節館。

現代文大意

九月四日に菊の花を賜り、歌を作って之に答える

平素、實より花を愛み、美しい春の花に心を奪われる。

秋の花は春の花よりさらに趣きを漂わせ、皎潔の貞心は真心をあかす。

思うに、幼い頃より孤独に憧れ、一人で花畑を楽しむ。愛らしい花卉は壁を越えようと、互いに美しさを競いあう。

長安の古刹には秋が訪れ、(我々は)天の果てで可憐な花を憐む。

ここは燥溼(気候)が宜しく、暮らしやすい。

美しい景色は海外に名を馳せ、微風に吹かれて我は瑤島の琉球に辿り着く。

蕉園、松嶺、竹籬の村など、至る所の名勝を尋ね詩歌を残した。

主人(中山王)は客も花も愛み、時には共に美しい花を觀賞する。

花萼樓を過ぎると美しい景色が広がり、良き友に逢えばさらに嬉しい。

帰省の帆が掲げられ再会が遠ざかり、離腸(別れの曲曲(歌))は籬根をめぐる。

僊館(天使館)に舞台が設置され、演出用の衣装は華麗に輝いている。

士族たちは或いは参差する玉を攜え、或いは佩金する駿馬に乗っている。

赤い官服はひらひらと揺れ、紫の紐も亦矯矯と飾られている。

にっこりと笑い、どこからいらっしゃったかという

問いに、欣然と応じた。

家は中山東苑の東にあり、萬疊の竹林に囲まれている。茶亭の側は零壇³であり、その頂には常に瑞雲が漂っている。

嘉き樹が植えられ、恩を承りて煙巒⁴の上にそびえ立っている。

我々は、崎山は素晴らしいところで、そこには綿繚たる山が広がり、山脈には雲濤がとどまり、靈氣(神秘的な気配)が漂うと聞く。

度々尋ねようとするけれど縁が薄く、風雨は朝晩に吹く。

重陽の日に会うことが叶え、夢のような旅はしばらく続いた。

この花を見れば王に会ったような気持ちになり、互いの真心を理解し合おう。

手元にあるこの清らかな花のように、晩節を保とう。月は明るく遠くまで照らし、その清い影は空で皓々と輝いている。

清い龍潭には神秘的な雰囲気が漂う。

甘谷は南陽にあると言い伝えられているが、今、仙人が棧道を開けてくれたのを確認した。

豪飲はできないが、舉杯して穹昊⁵を祀り、琉球の山々を借りて酒壺とし、滄水を倒傾し清醪⁶とみなす。

天に向かい皇帝の末永い御加護を賜ることを願い、亦、琉球中山王の長寿を祈る。

寓居して半年になり、度々盛情を荷り、意気投合であることを喜び、この拙文を用いて心を通わすことを願う。

今、遠別を目前にして、遺すものが無いが、この長文を書簡として残そう。これに載せた数曲の詩をご覧になれば、萬里の雲海を隔てているけれど、心が通い合い、翰墨の縁は末永く続くことを祈る。

中山王にこの詩文を正すことを願う。

道光十八年、戊戌重陽之月に、使者の林鴻年が荷物に寄りかかり虬島(琉球)の使節館の長風閣にて書した。

要約

9月4日に中山王より菊の花を承り、歌をもって答える。中山王は花を愛し、賓客を暖かく迎えてくれた。やがて我々は帰途につくが、山々を酒盃に、滄

³ 雨乞いの祭壇

⁴ 山中のもや

⁵ 青空。

⁶ 清酒。

海を清酒にみなし皇帝の幸運と中山王の長寿を祈る。今、遠別を目前にして、遺すものが無いが、この長文を書簡として贈る。これからは王とは万里の雲海を隔てているが、「翰墨の縁」によって心が常に通い合うことを願っている。

終わりに

「始相見」は詔書を前にして琉球の百官が地に伏して敬虔に拝み、中山王は皇帝に恭順の意を表し、朝見の列は静粛に並んでいるという初対面の光景がありありと描かれている七言律詩。

「諭祭禮成」は中山王の孝への思いが『礼記』を凌ぎ、その徳は先祖を祀る五廟で焚かれている香の如く、広まっていくという王の孝徳をたたえる七言律詩。

「冊封禮成」は服属を誓った王の爵位と領土が代々栄え、勤儉である琉球が歳時のときに都まで足を運び、皇帝のご心配を慰めるという七言律詩。

「題蓉桂二截句」は大自然に恵まれている琉球が皇帝からの恵みも厚く、琉球に与えられた高位から王の真心を見ろという七言律詩。

「中秋宴」は皇帝の命を行う儀式が粛々に行われた後、使節を労う宴が華やかに開かれた。帰途に海と波を黄金色に照らす満月を仰ぎ、月日が（四ヶ月も）経ってしまったことに気づいたという七言律詩。

「重陽宴」は龍潭に船を浮かばせ、酒宴を楽しんだ後、瑞泉門で挨拶を交わした王の笑顔が温かい。多才でよく名文を即する王の慧根（天資）が羨ましいという七言律詩。

「留別五十韻」は、前世の定めに導かれて風に乗り海を渡って中山王に出会った。島での暮らしはまさに仙人気分。女性は鮮やかな衣装を織り、男性は畑仕事をこなしている。庶民が食料に困っているの、使節団も食事に肉などの贅沢は言えない。帰国後は琉球の心を報告し、皇帝に琉球への恵みを請う。言葉は通じないが、帰国の途に付いたら再度会えなくなることを思うと、辛い気持ちが湧いてくるという別れを惜しむ心境を綴った五言の五十韻（百句）。

「九月四日承恵鞠華作歌報之」は、中山王が花を愛し、賓客を暖かく迎えてくれた。やがて我々は帰途につくが、山々を酒盃に、滄海を清酒にみ

なし皇帝の幸運と中山王の長寿を祈る。今、遠別を目前にして、遺すものが無いが、この長文を書簡として贈る。これから王とは万里の雲海を隔てているけれども、「翰墨の縁」によって心が常に通い合うことを願っているという、散文、韻文交じりの詩文になっている。

以上のように、「林勿邨殿撰贈琉球中山王詩書卷」は、尚育王との運命的な遭遇を喜び、王の孝徳を謳い、長寿を祈り、二度と再会できない別れを惜しむ格調高い詩文として綴られているのである。

ところで、林鴻年を迎えた琉球側が道光18年（1838）8月15日に記した「中山王尚育請存舊禮以勞使臣疏」⁷に、林鴻年の人柄を知る数行が綴られている。

（前略 筆者）竊惟天使入境以來、裁省供億、約束丁胥。上體聖主懷柔至意、嚴禁從前滋擾舊規、舉國臣民同聲感頌。臣育僻處海隅、無能隆禮、故於宴款之際代物以金。（中略 筆者）使臣屢辭不受、義正詞嚴允矣。（後略 筆者）

大意は以下である。「天使の林鴻年は琉球に入国して以来、供給の節約を図り、胥吏の行動を拘束した。皇帝の懷柔の意を身につけ、琉球に負担をかけた旧い規定を嚴禁した。琉球の国民は同声にそれを謳う。臣下の育は辺鄙な海外に居り、礼を高めることはできず、故に宴会で歓待する際に物品の代わりに金を以って献上した。（中略）使臣（林鴻年）は辞退して受け取らなかった。その辞退の言葉はまことに義正詞嚴⁸であった」という。

また、「留別五十韻」には「民尚難鮮食、吾何重餽牽。供需裁尺籍、樽節撤加籩」（「民は新鮮な食の確保が難しいため、我々も食事を重んじるわけには行かない。供給と需要に応じ、書籍の請求を減らし、節約するため特別な待遇を求めない」という。さらに「歸報恭藩靖、欽承聖化甄。天顔知有喜、海角慰孤懸」（「帰国して琉球の心を報告し、皇帝に琉球への恵みを請う。天子はそれを知れば、海角にいる琉球を慈しむことであらう」と、琉球への思いをつづる。

⁷ 趙新『續琉球國志略』沖縄県立図書館出版 昭和54年 p 74～75

⁸ 道理は正しく言葉は厳格である

上記の数行より林鴻年の琉球を思いやる気持ちが読み取られ、その人柄が伝わったといえよう。

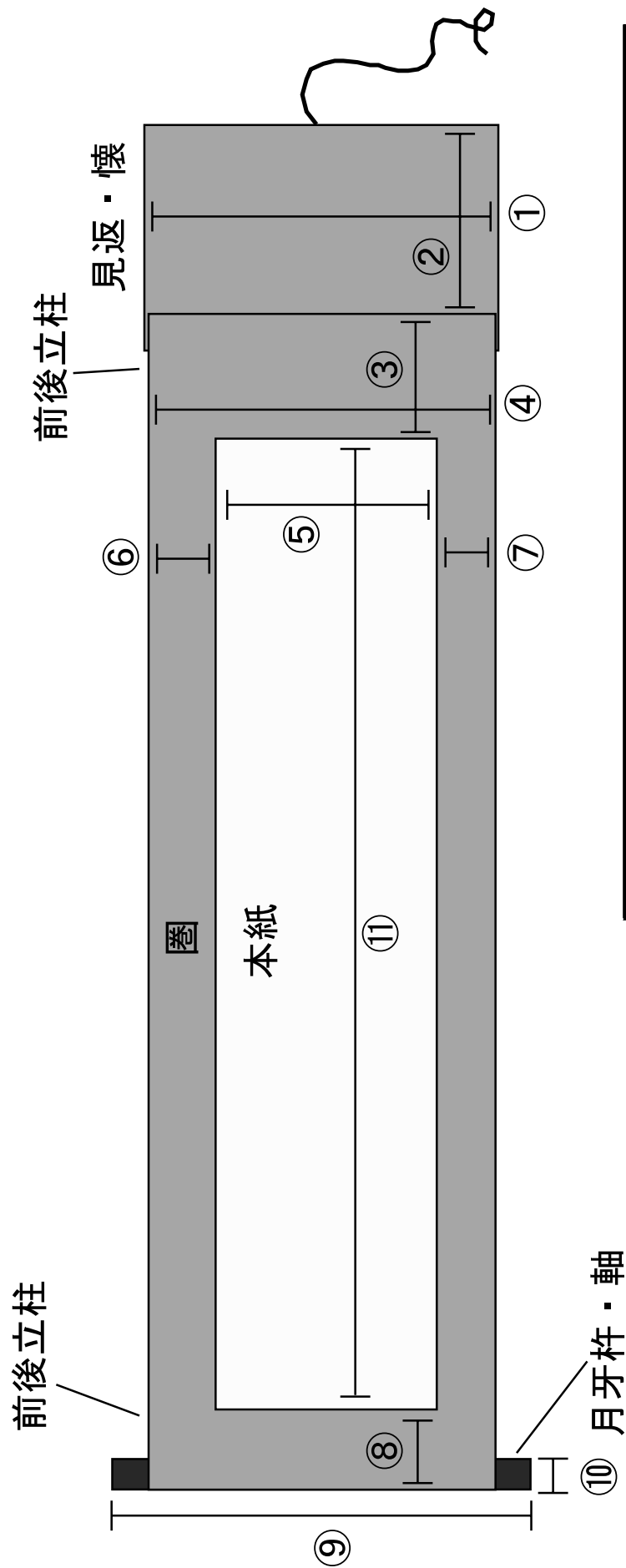
追 記

約百七十年の時空を越えた今日に、「林勿邨殿撰贈琉球中山王詩書卷」に巡り会えたことに感激し、また、注釈作業を励ましてくださった前県立博物館宮城清志館長、琉球大学上里賢一教授、北京大学図書館古書籍課姚伯岳課長及び関係者の方々、入力データを提供してくださった平川学芸員に心より感謝申し上げますと同時に、浅学非才のため、多くの過誤があろうかと、専門家のご叱正を賜りたく思う。

参考文献

趙新『續琉球國志略』沖縄県立図書館出版 昭和54年
偶爾讀書齋『清代狀元聯話之八』
『広辞苑 第五版』岩波書店 1998年
『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社 1983年
『漢語大詞典 縮印本』漢語大詞典出版社 1997年
諸橋轍次『大漢和辞典』大修館書店出版 昭和35年
『日本国語大辞典』小学館 昭和47年
『中日大辞典 増訂第二版』大修館書店 1986年
『漢字源』学習研究社 1993年（電子辞書）
『康熙字典』漢語大詞典出版社 2002年
『中国語大辞典』角川書店 平成6年

林勿邨殿撰贈琉球中山王詩集書卷



① 懐 縦	43.5cm	⑪ 本紙	第一紙	48.5cm	第九紙	45cm
② 懐 横	43.7cm		第二紙	45.5cm	第十紙	45cm
③ 前後立柱 横	17.6cm		第三紙	44.7cm	第十一紙	45cm
④ 前後立柱 縦	43cm		第四紙	45cm	第十二紙	44.5cm
⑤ 本紙 縦	39.3cm		第五紙	44.5cm	第十三紙	44.5cm
⑥ 圈 上	1.8cm		第六紙	45.5cm	第十四紙	45.6cm
⑦ 圈 下	1.8cm		第七紙	45cm	第十五紙	45cm
⑧ 前後立柱 横	14cm		第八紙	44.7cm	第十六紙	29.7cm
⑨ 軸 長さ	44.8cm		本紙全長			707.7cm
⑩ 軸 直径	2cm	全長	②+③+⑪+⑧			783cm

作図 北村いくみ